

&lt;実践報告・調査報告&gt;

## 主体性と異文化受容力を育成する正課外プロジェクト型教育の 実践と評価—WACE 世界大会の学生企画活動の事例より—

中西 佳世子<sup>1</sup>・中沢 正江<sup>2</sup>・木村 成介<sup>3</sup>・山本 尚広<sup>4</sup>・荻野 晃大<sup>5</sup>・下田 幸男<sup>6</sup>・平 春菜<sup>4</sup>

2015年8月19日から21日までの3日間、WACE第19回世界大会が京都産業大学で開催され、世界24の国と地域から約600名の産学連携教育の関係者が参加した。この国際大会は、本学学生にとっても貴重な経験を積むことができる機会であることから、大会の運営のサポートや各国からの来場者をもてなす学生参加活動の推進に取り組んだ。また、この貴重な機会を一過性のイベントに終わらせず、参加学生の次なるステップへとつなげるために、学生参加活動そのものを「教育」と位置付け、特に国際学会で求められる「外国語によるコミュニケーション」と「ホスピタリティ」に焦点をあて、学生の「主体性」と「異文化受容力（国際性）」を伸ばすことをその教育の狙いとした。そのために、企画立案段階から学生を主体的に関与させ、準備から実行まで学生主導ですすめる正課外プロジェクト型の教育プログラムを設計し、実践した。本報告では、WACE第19回世界大会での学生活動の概要と教育プログラムの実践内容、そしてアンケート調査の結果から明らかとなった教育効果について述べる。

キーワード：主体性、異文化受容力、正課外プログラム、学習成果測定

### 1. はじめに

WACE (the World Association for Cooperative & Work-Integrated Education) (WACE, 1983) は世界規模で産学連携教育の推進を図る国際機関であり、その本拠地をアメリカに置いてCWIE (Cooperative & Work-Integrated Education) の普及と関連団体の連携を深める活動を行っている<sup>1)</sup>。大学の創立当初から産学連携を重視してきた本学では2004年よりWACEの会員校となり、また近年では理事を輩出してきた。またコーオプ教育<sup>2)</sup>に関する論文、調査報告の発表（例えば、田中(2012)、田中(2013)、森・後藤(2013)など）も継続的に行っており、こうした中でWACE世界大会の日本誘致が実現し、2015年8月19日～21日の3日間にわたりWACE第19回世界大会（以下、WACE大会）が本学で開催された。京都産業大学では大会実行委員会を立ち上げ、目的別のワーキンググループを組織して大会準備にあたった。そのひとつである学生企画ワーキンググループ（以後、学生企画WG）は、大会の運営サポートと各国からの来場者をもてなす学生チーム活動の推進に取り組んだ。本稿はこの学生企画WGが取り組んだ学生活動の調査報告を行うもの

である。

学生企画WGでは、大会期間を通して20数か国から延べ1000名以上の参加者<sup>3)</sup>を見込む国際会議であるWACE世界大会での学生活動を当日のみのボランティア活動で終わらせるのではなく、その後の学生の成長に繋げるものにしたと考えた。そして企画立案段階から学生が関わるプロジェクト型の教育プログラムを計画し、教育目標を学生の「主体性」と「異文化受容力」を伸ばすこととした。

より具体的には、WACE大会への参与において「どのような企画に取り組むべきか」という意識を学生が持ち、学生が企画内容を考案し、その企画内容の実現をも学生主導ですすめることができるような段階的なグループワーク・プログラムを計画し、同時に彼等の企画実現に向けた活動をサポートする教職員の体制を構築した。そして学生企画WGでは、WACE大会における学生の参与を正課外のプロジェクト型の教育プログラムとして実施した。

本稿では、続く2章で、学生企画の内容と方向性決定の経緯に言及したうえで、教育目標の設定について説明する。3章では学生の活動を、企画立案フェーズ、準備活動フェーズ、当日活動フェー

<sup>1</sup> 京都産業大学 文化学部、<sup>2</sup> 京都産業大学 学長室・教育支援研究開発センター、<sup>3</sup> 京都産業大学 総合生命科学部、

<sup>4</sup> 京都産業大学 コーオプ教育研究開発センター、<sup>5</sup> 京都産業大学 コンピュータ理工学部、<sup>6</sup> 京都産業大学 外国語学部

ズ、振り返りフェーズの4フェーズに分けて、学生企画の取組の一連の流れを紹介する。4章では、一連の教育プログラムの中から事例として、活動初期に実施した合宿におけるグループワーク・プログラムの実践例を報告する。ここでは、合宿で使用したワークシートや学生が作成した模造紙等の事例を引用し、「主体性」を引き出し、「異文化受容力」を高める工夫を具体的に述べる。5章では、本取組の教育目標がどの程度達成されたのかをアンケート・データに基づいて検証する。具体的には、事前アンケートと事後アンケートの結果を吟味し、参画学生の中で「主体性」と「異文化受容力」がどの程度伸びたのかを考察する。6章にて、学生企画の総合的評価の検証を行い、最後に WACE 世界大会での本調査における教育目標の達成という観点から本稿を総括する。

## 2. 学生企画の経緯・方向性・教育目標

本章では、学生企画 WG が行った具体的な活動フェーズを報告するが、それに先立ち、この活動内容と方向性が設定された経緯について言及しておく。

### 2.1. 経緯と方向性

今回の学生参画企画は2013年に実施されたWACE第18回世界大会におけるダーバン工科大学(以下DUT)の学生の活動にヒントを得た。第18回大会におけるDUTの学生達の親切な案内やサービスは非常に好感を持てるものであり、本学の学生にもWACE世界大会という国際会議の場で活躍する機会を是非与えたいと思うに至った。具体的なDUTでの活動は以下のような内容であった。

- a) Faculty of Applied Sciences: Maritime Studies の学生による船上トレーニングの実演
- b) Faculty of Arts and Design: Media, Language & Communication, Journalism の学生による英語ニューズレターの発行
- c) Faculty of Health Sciences: Chiropractic and Somatology の学生によるマッサージとカイロプラクティックの体験
- d) Faculty of Management Sciences: Hospitality and Tourism の学生による空港での出迎え、Public Relations Management の学生によるアンバサダー

DUTでは準備期間が1か月あまりと短く、学生

の参加人数も小規模なものであったが学生参画企画のテーマ“WIL-In-Action”<sup>4)</sup>は大会の全体テーマである“Wil-Power: Fueling the Future Workforce”に即して設定されていた。さらに学部の学びと関連させた学生参加をWIL(Work Integrated Learning)の実践とする方向性が明確で、学科での学びを生かす形で学生達はホスピタリティを發揮しており大変好感が持てた。加えて英語を公用語とする南アフリカでは学生の英語運用力の問題はほとんど考慮しなくてもよいという状況であった。

翻って、本学での学生参画企画では、専門教育との繋がりと言語運用力が問題となるが、それだからこそ、外国語によるコミュニケーションを用いて日本らしいチーム力とホスピタリティを發揮することを、CWIEでも求められるグローバル化に学生が踏み出す一歩と捉えることが可能だと考えた。また準備を早めることで意識の高い学生の参加が望め、各部署への協力も仰ぎやすくなり、来場者への満足度と本学におけるコーオブ教育への理解を深めることができると考えた。

そして何より、長期で多岐にわたると予想されるこのプロジェクトを推進するにあたり、その方向性を見失うことなく、また、後に繋がる取り組みにするためには、WACE第19回大会の全体テーマ“Towards a New Stage of Cooperative and Work-Integrated Education for Innovative Minds with Global Competency”との整合性を明確にし、学生参画企画を教育活動として取り組むことが不可欠であると感じた。そこで学生企画のテーマを“A Step towards a Fulfilling Global Experience”と定め、CWIEの実践として大会全体の方向性との同調を図った。さらに学生企画WGでは、a) 学生、b) 来場者全般、c) 学内の関係者、d) 学外の関係者という観点から大会成功に向けた具体的な到達目標を以下のように定めた。

- a) 学生が「主体性」と「異文化受容力」を身に着ける
- b) 来場者全般の参加満足度を高める
- c) 学内のコーオブ教育への意識を高める
- d) 学外へ京産大のコーオブ教育を周知させる

この内、a) 学生が「主体性」と「異文化受容力」を身に着ける、という箇所が本稿の調査報告の骨子となるが、この目標の成果はその他の到達目標の達成とも密接に関連するものである。これらの大会全体における学生企画の総合的評価については前述したとおり、本稿の6章で言及する。

## 2.2. 教育目標

本プログラムでは、前述したように、教育目標として、「主体性」と「異文化受容力」の向上を目指した。そして「主体性」と「異文化受容力」の本プログラムにおける定義を、教育効果測定と合わせて検討した。「主体性」については、具体的な指標として、「行動を起こそうとする意志」「行動を完了しようとする意志」「逆境に耐える忍耐」からなる「特徴的自己効力感尺度」(成田他, 1995)を採用し、学生の到達度の測定を行うこととした。「異文化受容力」については、自分とは異なるコミュニティに属する(文化的背景の異なる)メンバーに対して、「積極的に働きかける態度」(積極的関与)、同じく自分とは異なるコミュニティに属する(文化的背景の異なる)メンバーに対して「仲間の異質さに耐える」耐性(異質耐性)からなる「新入成員に対する寛容的反応尺度」(植村, 2001)を採用し、学生の到達度の測定を行った。

教育効果の測定方法については、5章に詳述するが、上記の「特徴的自己効力感尺度」と「新入成員に対する寛容的反応尺度」を利用し、質問紙調査を本プログラム参加時(事前)と本プログラム終了時(事後)の2回実施した。これにより、学生の本プログラムに参加する前の状態(事前状態)と参加した後の状態(事後状態)を測定した。

## 3. 本取組の全体フロー

本章では、本学生企画について、企画立案フェーズ、準備活動フェーズ、当日活動フェーズ、振り返りフェーズの4フェーズに分けて、取組全体のフローを概説する。

### 3.1. 企画立案フェーズ

上述のように、本取組においては、学生の「主体性」と「異文化受容力」を高めることを教育目標とした。そのため、企画立案の早い段階より学生を直接関与させ、自らが企画を考えたり、議論する機会を多く設けた。まず、募集説明会を2014年12月25日・26日、2015年1月8日の3回開催し、合計で91名の参加を得た。

募集説明会にて興味を持ってくれた学生を対象として、2015年1月20日に学生企画検討ワークショップを開催した。本ワークショップでは、WACE大会における取り組みを、「総合サポート(受付や誘導案内など来場者に対する様々なサービスの実施)」、「日本文化紹介(主に外国からの参加者を対象に日本文化を紹介するイベント等の実施)」、「京産大紹介(来場者に京都産業大学を紹介

するイベント等の実施)」の3つ枠組みに分け、5,6名の少人数グループでブレインストーミング(以下ブレスト)を行い、学生として何ができるのかを考えてもらった。教職員からの具体的な教示は最小限にし、学生がゼロからアイデアを出すことを重視してワークショップを運営した。ブレストの結果様々なアイデアが寄せられ、また、アイデアはグループ間でも共有された。学生にとっては、学生企画全体のイメージをつかむのに役立ったと思われる。本ワークショップで本活動への参加の意思を固めた学生については、次回ミーティングまでの宿題として、実際に自分がやりたい企画を2つ選んで具体的な企画を検討し、当該企画についてA3用紙に絵などを使ったプレゼン資料としてまとめるように指示した。本ワークショップには45名の学生が参加した(10名の学生からは参加を希望するがやむなく欠席する旨の連絡があった)。

2015年3月27日には、学生参画企画のキックオフミーティングとして、企画案の発表会(第一回全体ミーティング)を開催し、参加の意思を固めた学生のうち25名が参加した。ミーティングではまず、前回のワークショップの宿題として作成したA3用紙に記載された自分がやりたい企画のアイデアについて、1分間のプレゼンテーションを行った。その後、ポスター発表形式で意見交換を行い、質問や意見を交換する場を設けた。ポスターの前で学生同士が積極的に議論する姿も見られ、自身のアイデアについてのフィードバックを受ける機会になった。

2015年4月4日から5日にかけて合宿形式のミーティングを実施した。この合宿では、「アイデアからプランへ」をテーマに、これまでブレストなどで出してきたアイデアを実行可能な計画に練り上げていくことを目的とした。合宿には、32名の参加があり、合宿の最後には、学生チームの名称を「京輪(きょうわ)」とすることに決定した。この合宿の活動内容については、「4. 教育プログラム事例『合宿プログラム』」において詳しく述べる。

### 3.2. 準備活動フェーズ

合宿までの活動で得た企画案およびアクションプランをもとに、本番に向けた具体的な準備活動に入った。基本的には各グループ(総合サポート、日本文化紹介、京産大学紹介)ごとに準備を進めた。各グループの準備活動の内容は多岐にわたり、それぞれの企画の調整および準備から、英語対応を練習するための英会話クラスの開催、パンフ

レットの作成などを進めた。また、WACE CEOのポール・ストーンリー氏の来学にあわせてウェルカムイベントを開催し、その様子がKBS京都のニュースや毎日新聞などで取り上げられるなどした。

各グループでの準備活動に加えて、全体の進捗状況の確認や、情報共有、意見交換のため、定期的（1ヶ月に1回程度）に全体ミーティングを開催した。全体ミーティングでは、各グループの進捗状況の発表と、それに対する意見交換（フィードバック）、ミーティング当日の振り返りを基本構成としたプログラム設計を行い、実施した。全体ミーティングの進行については、基本的に、各グループのリーダーおよびサブリーダーに担当してもらった。世界大会直前の8月17日および18日には、会場の設営、業務内容の説明会、リハーサル等を行い、本番に向けて準備を整えた。

### 3.3. 当日活動フェーズ

2015年8月19日から21日までの3日間にわたりWACE第19回世界大会が本学で開催され、京輪の学生達が大会の運営や来場者をもてなす様々な活動を行った。以下に、大会本番における学生の活動内容について概説する。

#### 3.3.1. 総合サポートグループの本番での活動

##### a) 学生本部

学生参画企画全体の運営のため、学生本部を設置して学生企画全体の管理運営を行った。

##### b) サポートデスク

サポートデスクを設置し、多言語（日本語、英語、韓国語、中国語）で来場者のサポートを行った。会場案内、タクシーの手配、交通案内、Wi-Fiの設定など多岐にわたって来場者への対応を行った。

##### c) 受付・クローク

受付およびクロークを設置し、サポートデスクと連携しつつ来場者の対応を行った。

##### d) 誘導案内

キャンパスや建物内での誘導案内を行った。特に、神山ホールから5号館や、5号館から並楽館などへの人の流れがスムーズになるように留意した。

##### e) セッションサポート

全体会や分科会について、1会場あたり2名の学生を配置し、運営を補助した。

##### f) 打ち水イベント

暑い京都の夏を少しでも涼しく感じてもらおうと、バスが到着する神山ホール前や5号館前で、

浴衣を着た学生が打ち水をしながら来場者を出迎えた。

##### g) 学生企画パンフレット配布

参加者用に日英併記のパンフレットを作成して配布した。冊子には、学内MAPやプログラムスケジュール、学生企画に関する情報はもとより、日本文化紹介グループが収集したホテル周辺のレストランや土産物店などの情報も掲載した。

##### h) 食事のアレルギーおよび原材料表示

主に昼食（ビュッフェ）のメニューについて、アレルギー表示や原材料表示を行った。

#### 3.3.2. 日本文化紹介グループの本番での活動

##### i) 茶道実演・体験イベント

茶道部の協力のもと、茶道の実演や茶道の体験イベントを実施した。

##### j) 書道体験イベント

書道部の協力のもと、うちわ・色紙等へ希望の漢字を書写したり、来場者に習字を体験してもらったりする企画を実施した。

##### k) 日本武道の演武

合気道部、居合道部、空手道部による演武を行った。

##### l) 京都文化紹介のパネル展示・パンフレット作成

京都に数多くある「橋」の柱につけられている飾り金具をテーマとしたに日本文化紹介パネルを設置し、紹介した。

#### 3.3.3. 京産大紹介グループの本番での活動

##### m) 京都産業大学の産学連携教育のパネル展示

本学の特色ある産学連携教育を紹介するため、下記の7つの授業やコースについて、パネル展示をおこなった。

① O/OCF PBL（上賀茂神社クラス）

② むすびわざコーオブ

③ Global Science Course

④ O/OCF PBL（JT B 西日本クラス）

⑤ 企業と学生のハイブリッド

⑥ ミツバチに関するプロジェクト

⑦ 自己発見と大学生生活

##### n) Student Session

本学の特色ある産学連携教育を紹介するため、学生のみによるカンファレンス形式の英語プレゼンテーション・セッションをWACE世界大会2日目に実施した。発表事例は、① O/OCF PBL（上賀茂神社クラス）② むすびわざコーオブ ③ GSCであり、それぞれの授業やコースを受講している学生がパワーポイントを用いて各活動を英語で紹介した。

### 3.4. 振り返りフェーズ

今回の活動は学生の教育活動として捉えており、本番当日の活動で終わりにするのではなく、学生の将来の成長にもつながるよう振り返りが重要であると考えた。そこで、2015年9月25日に「京輪」のメンバーによる振り返り会を開催した。振り返り会では、ワークシートを用いて①当初どんな体験を期待していたか②当初の期待への満足度③活動全体における自己評価④自己評価での加点や減点の根拠⑤活動を通して変わった点⑥他者にこの活動の魅力をどう伝えるか、を振り返って考えた。最後に、「学んだこと」「将来の抱負」の2点について一人ひとり発表してもらい、学生自身が自らの活動について振り返る機会とするとともに、教職員が学生の成長を確認する場とした。

### 4. 教育プログラム事例「合宿プログラム」

3章に紹介した全ての取組について、教育プログラム上の特徴を解説する事は紙面の都合上困難である。そこで、本稿では、プロジェクト型教育で一般に支援が難しいと言われるプロジェクト発足直後に行ったプログラムであること、その後に行ったワークを比較的、網羅して取り入れていることを理由とし、「合宿プログラム」を例として解説する。

合宿は、本プロジェクトへの参画を決心した学生のみに参加を許可した。よって、WACE大会で実際に企画・運営に携わるメンバーでの初めての議論となった。当日に実施する企画・取組について、合宿以前に行ったアイデアレベルのプレストだけでなく、実施・実現に関する具体的な議論をも引き出せるようなプログラムを設計した。また、合宿以後では、このようなワーク設計・運営は3つのグループ(3.3.1～3.3.3に前述)のリーダーと教職員のチームにより行われたが、合宿はリーダー選出以前であった為、教職員により設計、運営がなされた。

他の準備活動フェーズ、振り返りフェーズのプログラムと同様に、本合宿でも学生自身の自発的、自由な発想からアイデアを出させ、学生が自分達自身の力で考え抜くことを徹底させるため、教職員が合宿における各種ワーク内で介入する際はファシリテーションやコーチングのスタンスを基本とした。

合宿の概要は次の通りである。

- ①日程：2015年4月4日(土)～4月5日(日)
- ②場所：京都産業大学松の浦セミナーハウス(学生用合宿施設)

③参加：32人

④プログラム： ※表中の括弧付番号は後述の解説に連動している

日時	概要
1日目 13:00-14:00	ウェルカムセッション 挨拶・オリエンテーション (1) アイスブレイク 配属グループ・部屋割の発表
14:00-14:15	チェックイン
14:15-16:15	(2) 企画検討セッション
16:15-16:30	バーベキュー準備
16:30-19:30	(3) バーベキュー & お風呂タイム
19:30-22:30	(4) アクションプラン検討セッション
22:30-	フリータイム→就寝
2日目 7:00-8:30	起床 朝食
9:00-10:00	(5) 発表準備セッション
10:00-11:30	(6) アクションプラン発表セッション
11:30-12:00	クロージング&集合写真撮影

#### 4.1. 各種ワーク概要とその設計意図

##### (1) アイスブレイク

まず、①名前②学部・学年③学生参画チームのチーム名称案④合宿直前に行ったキックオフ・プログラムに参加した感想を記入したフリップを作成する個人ワークを行った。その後、フロア全体を使用し、学生にフロア内にいる学生とペアとなってもらい、フリップを使って①②欄を使用して自己紹介し、③について、何故そのような名称を考えたのか、④参加したキックオフ・でどのような感想を持ったのかのミニトークを行った。互いのミニトークが終わり次第、次のペアを探すことを繰り返すワークを行った。

なお、このとき収集した③のチーム名称案から、合宿の最後に投票形式でチーム名称を決定し「京輪」という本プロジェクト参加学生のチーム名称を得るに至った。また、このワークの直後に、事前に実施した希望調査に基づいて決定された配属グループ(総合サポート、日本文化紹介、京産大紹介、の3グループ)が発表された。後述の(2)(4)(5)のセッションはグループ毎に行った。

このセッションの主な設計意図は、参加学生間の交流を通じ、このワーク後に配属されるグループや学部を越えて各メンバーに興味を持つことで「異文化受容力」を育成すること、次々に行動し自分のアイデアを他者に説明することを前提とするワークによって「主体性」を育成することであっ

た。

## (2) 企画検討セッション

まず、キックオフ・プログラムで発表した自分の企画アイデアをまとめた企画書（A3両面で、表が図やイラストを用いたコンセプト概要、裏が目的や実現方法、実現可能性について論じた企画書になっている）を用いて、グループ内での自己紹介とアイデア共有を行った。



図 1. アイスブレイクの様子

次に、付箋を用いたブレストを行った。グループ内で共有したメンバーの企画内容や、合宿までのプログラムやミーティングで出されたアイデアについて互いに情報共有しながら、より多くの企画アイデアを収集した。

最後に、グルーピングと取捨選択を行った。似たアイデアや、合わせて実施した方が効果の高そうなアイデアを一つにまとめ、実現可能性や必要性が低いものや費用対効果の面で企画実現が困難なアイデアを取り除いた。このとき、教職員側は、実現可能性においては知りうる情報を提供し、WACE 大会におけるニーズや他大学や民間企業からの参加者にとっての面白さはあるのかについて、掘り下げるような質問を行い、学生の判断を促した。

この際、このセッションのゴール（終了状態）がどのような状態かの制約として働いたのが図 3 に示すワークシート①である。このワークシートは、少なくとも 3 つの企画アイデアについて、タイトルと概要をはっきりさせてから本セッションを終えるというゴールの制約として働いた。

このセッションの主な設計意図は、自分が考えたアイデアの魅力や必要性を他者に説明することや、他者のアイデアを取り入れて自分のアイデアを洗練すること、自分が考えたアイデアが説得力を持っていれば、実際に WACE 大会に採用され

る可能性を実感することによって、「主体性」を育成すること、他者の様々なアイデアに共感し、共に実現可能性や必要性をグループで吟味することで、他者のアイデアを受入れ共に考える「異文化受容」の態度形成を促すことである。

## (3) バーベキュー

バーベキューの企画運営と、本合宿の進行案内、本合宿の実施パンフレット作成（パンフレットの全表記は英語が併記されており、英語化にはその後大量に発生すると想定されるネイティブや英語教員による英文法チェックを含む英語化タスクの予行練習の意味合いが含まれていた）は、本合宿プログラム実施に向けて結成された「合宿企画チーム」の学生が中心となって行った。バーベキュー時間に、笛を定期的に鳴らし、その合図で参加者が使用言語を英語と日本語で切り替えながら、協力し合ってバーベキューを作り上げ、食べるという取り組みが「合宿企画チーム」によって、企画・準備された。しかし、進行がタイトになってしまったこと等を受け、実際には実施されなかった。このことによって、企画メンバーのモチベーションが下がることはなかったが（それよりは、非日常空間でほぼ初対面のメンバーを含んだ共同作業を行っている、合宿の進行を担当する、ということによる楽しさややりがいがあったようである）教職員側としては、多言語という分かりやすい形で異文化を受容する難しさを体験する仕掛けになり得ただけに残念であった。

## (4) アクションプラン検討セッション

本セッションでは、(2)にて作成した企画検討のワークシート①をセッションの開始状態としてアクションプラン（実行計画）の形が見えている状態に至ることを目指して行われた。ワークシート①で出た複数のアイデアを、1 アイデアずつ図 5 のワークシート②の形に落とし込むことをゴールとした。ワークシート②は、文章で実行計画書をいきなり書くのではなく（いきなり実行計画書を書こうとすると、文章表現の難しさと実行計画を纏める難しさを同時に解消せねばなくなる）、共同作業で企画書のドラフトが仕上がるようなフォーマットを提供し、時間軸を意識しながら具体的な実行計画を合意できるよう設計されている。

本セッションの主な設計意図は、実行計画を自分達で議論して作り上げることで、企画立案の主体が他でもない自分達であるという認識を確かなものとし、その後の主体的な行動を引き出すことである。



図 2. 企画検討セッションの様子



図 4. アクションプラン検討セッションの様子

2015/04/04 Sat. - 2015/04/05 Sun.  
WACE 観戦合宿 in 松の浦 成果シート①

1. 我々は、次の企画チームです  
総合サポート ・ 日本文化紹介 ・ 京都産業大学紹介

2. WACE 世界大会において、我々は、下記の企画案について実施する予定です

企画案①	タイトル	骨作りうろつ作り
企画案②	タイトル	ワシコ-3 ラウンド 活字印刷
企画案③	タイトル	香道 体験
その他の企画案		・ 語学 (HSK、TOEIC、TOEFL、TOFEL、TOEIC、TOEFL)

以上

図 3. 企画検討で使ったワークシート①

2015/04/04 Sat. - 2015/04/05 Sun.  
WACE 観戦合宿 in 松の浦 成果シート②

② 1. 我々は、次の企画チームです  
総合サポート ・ 日本文化紹介 ・ 京都産業大学紹介

2. このシートは以下の企画案に関するアクションプランです

企画案	タイトル
	五感で感じとる日本文化

3. 次の通りタスクを実行していく予定です

4月	次回ミーティング 日程	内容
	見学会 (映画館・美術館) + 博物館 → 京都・奈良・和歌山・奈良県	
	奈良・和歌山 実地 + 写真撮影 和歌山・和歌山	
	和歌山・和歌山 和歌山	
	企画案作成 (予定・実施計画)	
5月		
	MT (全休) 和歌山・和歌山	
	13日第2回学生全体MT(選抜状況共有 (全プラン、アクションプラン、ゲームリ-ゲーム、チームメンバーの報告))	
6月		
	MT (全休)	
	和歌山 実地 (6月15日)	
	企画案 WACE の中へアップロード	
7月		
	うらな作成、和歌山 実地 (7月15日)	
	MT (全休)	
8月		
	MT (全休)、和歌山 実地	
	和歌山 実地 (和歌山)	
	8月19日 (水) ~ 8月21日 (金) 【四日】	

以上

図 5. アクションプラン検討に使ったワークシート②

(5) 発表準備セッション

本セッションでは、その後の企画内容のグループを越えた共有を主な目的とした発表のため、(4)のセッションに引き続きグループ毎に活動した。(3) (4) で仕上げた企画概要とアクションプランを材料としながら、他のグループに分かりやすく企画の概要と魅力を伝えるためにはどのような発表が相応しいか、発表方法も含めて各グループで活動が進められた。

本セッションの主な設計意図は、グループ内で様々な視点から、他のグループの興味関心や知識状態について推定しながら議論し、自分とは異なる

他者に対する意見表明の際に必要な工夫を経験することで、異文化受容力を育成することであった。また、発表という具体的なタスクを前にして発生する様々な役割の中で、自分の役割を自ら見出して参加する意欲を高めることであった。

(6) アクションプラン発表セッション

本セッションでは、全グループが (2) (4) で議論した企画内容を (5) で検討した発表手法を用いて、発表を行った。発表は、1グループ20分、その後質疑応答10分とした。異なるグループの発表を聞いた学生達は、(2) (4) (5) で十分にアイデアを実現可能なプランにし、他者にその内容を説



図 6. 発表準備セッションの様子



図 7. アクションプラン発表セッションの様子

明する際、試行錯誤を経験していた為、各企画の具体的な説明を求めたり、企画実行に必要な物品を確認したりと質問が飛び交い、活発な議論となった。

本セッションの主な設計意図は、他のグループの企画内容やアクションプランの具体性の度合い、チームワークを知り、自グループの活動を客観的に捉え直すことである。他のグループの作業の進め方や、自グループのチームワークについて、出来ている部分を認め、出来ていない部分について「自分ももっとできたはずだ」という捉え直しが発生しやすい状況を作ること、自グループや「京輪」への更なる主体的関与を促した。

#### (7) 振り返り

初日及び2日目のセッション終了時に自己の活動への内省を促す為に毎月の全体ミーティングで実施した「リフレクション・シート」の記入を合宿でも行った。リフレクション・シートの項目は以下の通りである。

- ①本ミーティングをすることで、運営側（本ミーティングを企画した教員の方々）は、何を達成しようとしていたと思いますか？ 箇条書きで記述して下さい。
- ②本ミーティングで貴方が貢献できたと思う事はなんですか？ 箇条書きで記述して下さい。
- ③本ミーティングで、貴方が運営側の目的（1. に記述したこと）とは別に、学びとった事はなんですか？ 箇条書きで記述して下さい。

これは、ミーティングやセッションに参加する際、常に運営側の意図（①に相当）とは別に、自分独自の参加目的（②に相当）が何であるかを意識させることが狙いである。また、常に当初の目的にはなかった学習成果（③に相当）を自分なりに振り返ることを求めるものである。各活動の終わりに、このような振り返りを繰り返すことで、

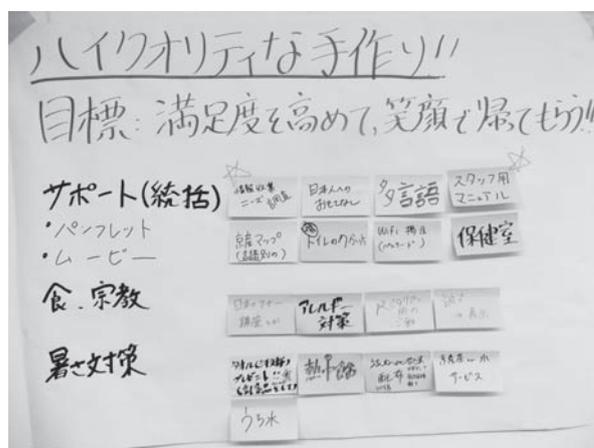


図 8. 発表用の模造紙例

自身の本プログラムにおける学習活動を把握させ、次の学習活動において「どのような貢献をしようか」と、戦略（目的意識）を持って主体的に関わる意欲を引き出すことを狙っている。

合宿における「リフレクション・シート」の記述では、①について、「目的の明確化」「団結力を高める」「企画の具体的な実現性を高めること」といった回答が得られた。多くの学生が、合宿の成果として求められていることを認識できていたと考えられる。②については、「チームの流れに合わせながら自分も積極的に参加」「細かいところをしっかりと考えた」というものから、「一つの企画の話し合いの中で流れや意見をまとめること」「意見を聞きアイデアを発展させる」という全体最適を視野にいたれた活動が報告された。③については、「リーダー、サブリーダーだけに全てを委ねず、自主（主体的）に行動すること」「行動することの大切さ」「ビジョンの明確化の重要性」など、主体的な行動に対する重要性を認識したことが、主な学習成果として報告された。

## 5. 成果測定と考察

本取組において、設定した「学生が『主体性』と『異文化受容力』を身に着ける」という到達目標の成果を測定するため、筆者らは次のように評価計画をすすめた。

- (ア) 参加学生の事前状態と事後状態について、教育目標である「主体性」「異文化受容力」の達成度を測定し、参加学生がどのように成長したのかを捕捉した。事前・事後で2.2に詳述した尺度を元に同じ質問票を用いて測定を行った。事前のプレテストは、本プログラムに参加が確定した時点で質問紙の配布を行い、収集した。事後のポストテストは、WACE大会終了後の振り返り(4.4にて詳述した9月25日に実施したもの)にて行った。プレ・ポストのデータの回答者数は、データ欠損分を除き、参加学生全体の31名中、28名であった。
- (イ) 月に一度程度の全体ミーティング等では、「リフレクション・シート」の記入を毎回求め、「当該ミーティングの運営側の意図(冒頭で教員が述べていることに関する再生記述)」「当該ミーティングで自分が貢献できたと思う事(活動内容の記述)」「当該ミーティングで運営側の意図とは別に学び取った事は何か(学習成果の記述)」の3点の記述を求め、(ア)のデータと関連づけて本プログラムにおける成長であったのかどうかの検証材料として収集した。
- (ウ) 来場者アンケートにおいて、学生参画に関する満足度について自由記述を求めた。

本稿では、(ア)の調査結果を中心として、本教育プログラムの成果について概要を見た上で、分析者による考察結果を報告する。

### 5.1. 「主体性」に関する結果

「主体性」について、「行動を起こそうとする意志」「行動を完了しようとする意志」「逆境に耐える忍耐」からなる「特徴的自己効力感尺度」(成田他、1995)を使用し、事前・事後に質問紙調査を実施したところ、事前と事後でそれぞれ図9・図10が得られた。

図9、図10は、事前・事後のデータについて、それぞれの設問に対し、「1. そう思わない」～「5. そう思う」までの5段階で調査し、ポジティブ評価(「5. そう思う」)が多かった順に設問を並べ替えたものである。項目の頭にある番号は、質問票上の設問の順番を表している。設問順の番号の

次に●が付されている項目は、反転項目<sup>5)</sup>である(図中では、既に反転した状態で掲載している)。

図9と図10を見比べると、全体的にポジティブな評価(グラフ右端が「そう思う」であり、その隣の「どちらかというと思う」との合計がポジティブな反応である)に転じている様子が確認できる。特に数値の向上が見られた項目は、「1 自分が立てた計画はうまくできる自信がある」「21 私は自分から友達を作るのがうまい」「10 友達になりたい人でもなるのが大変なら諦める」である。他に、「4 新しい友達をつくるのが苦手(反転)」「11 面白くないことをする時でも終わるまで頑張る」「6 何かを終える前にあきらめてしまう(反転)」「12 何かをしようと思ったらずぐに取り掛かる」「15 思いがけない問題が起こったとき、うまく対処できない(反転)」等で向上が見られる。

本尺度では、部分尺度が設定されていないが、プレテストの時点でポジティブに評価されていた「16 難しそうなのは学ぼうと思わない(反転)」「17 失敗すると一生懸命やろうと思う」「3 初めはうまくいかない仕事でも続ける」といった設問項目は「逆境に耐える忍耐」を象徴する項目であると考えられる。これに、「行動を完了しようとする意志」や「行動を起こそうとする意志」が追隨する形で伸びたと理解できる。

### 5.2. 「異文化受容力」に関する結果

「異文化受容力」について、「積極的行動」「異質耐性」からなる「新入会員に対する寛容的反応尺度」(成田他、1995)を使用し、事前・事後に質問紙調査を実施したところ、事前と事後でそれぞれ図11・図12が得られた。

図11、図12は、事前・事後のデータについて、それぞれの設問に対し、「1. いつもそうしない」～「5. いつもそうする」までの5段階で調査し、部分尺度である「積極的関与」と「異質耐性」に分け、並べ替えたものである。項目の頭にある番号は、質問票上の設問の順番を表している。設問順の番号の次に●が付されている項目は、反転項目である(図中では、既に反転した状態で掲載している)。

図11と図12では、「積極的関与」が、上部8つであり、「異質耐性」が、下部4つである。

図11と図12を見比べると、全体にポジティブな評価(図右端が「いつもそうする」であり、ポジティブな評価は「いつもそうする」と「たいていそうする」の合計であると理解できる)がネガティブな評価に転じていることが確認できる。

そのような中、唯一ポジティブ評価に大幅に転

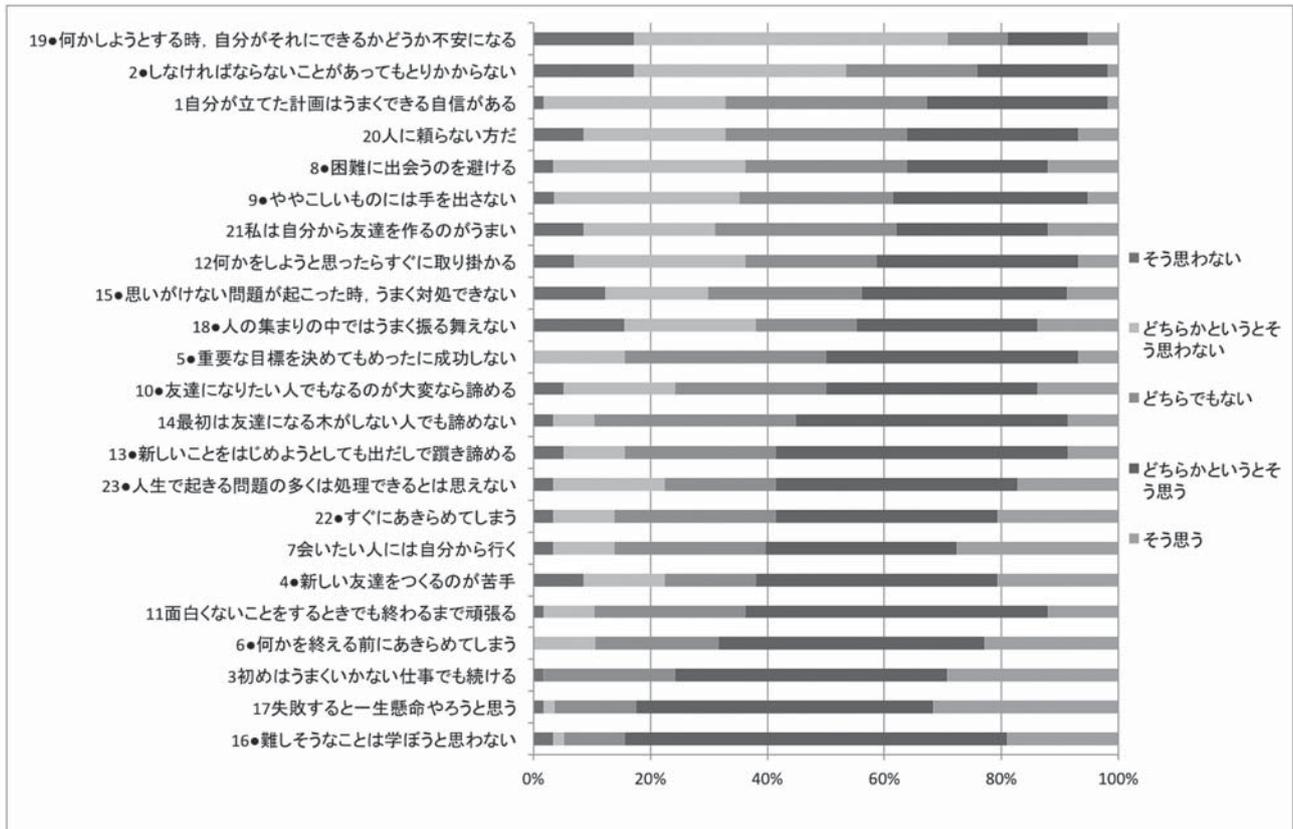


図 9. 主体性 (プレテスト・降順) N=28

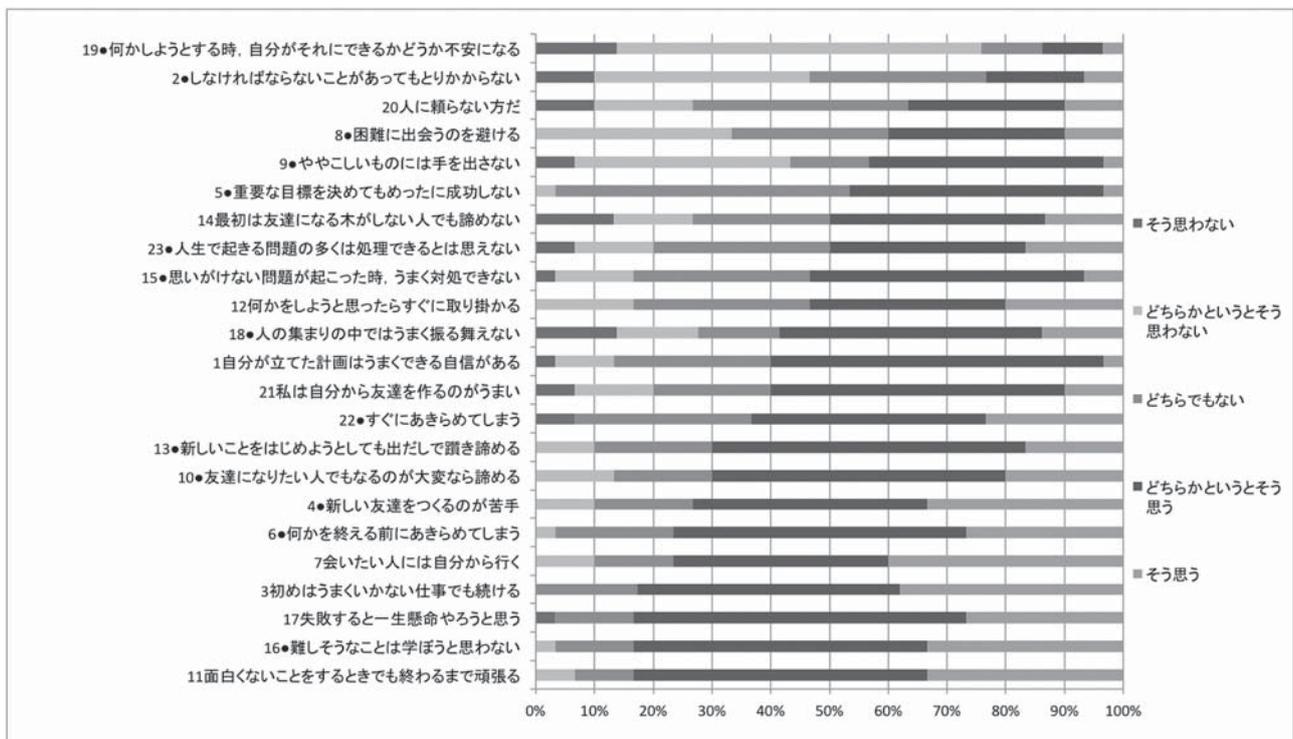


図 10. 主体性 (ポストテスト・降順) N=28

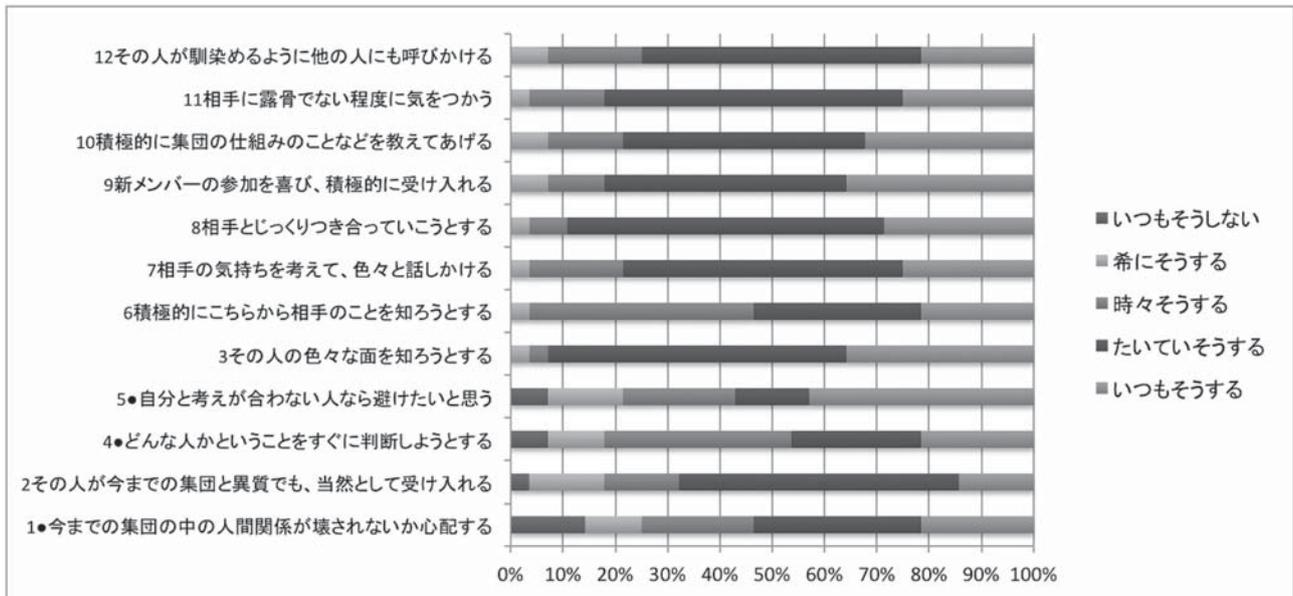


図 11. 異文化受容 (プレテスト) N=28

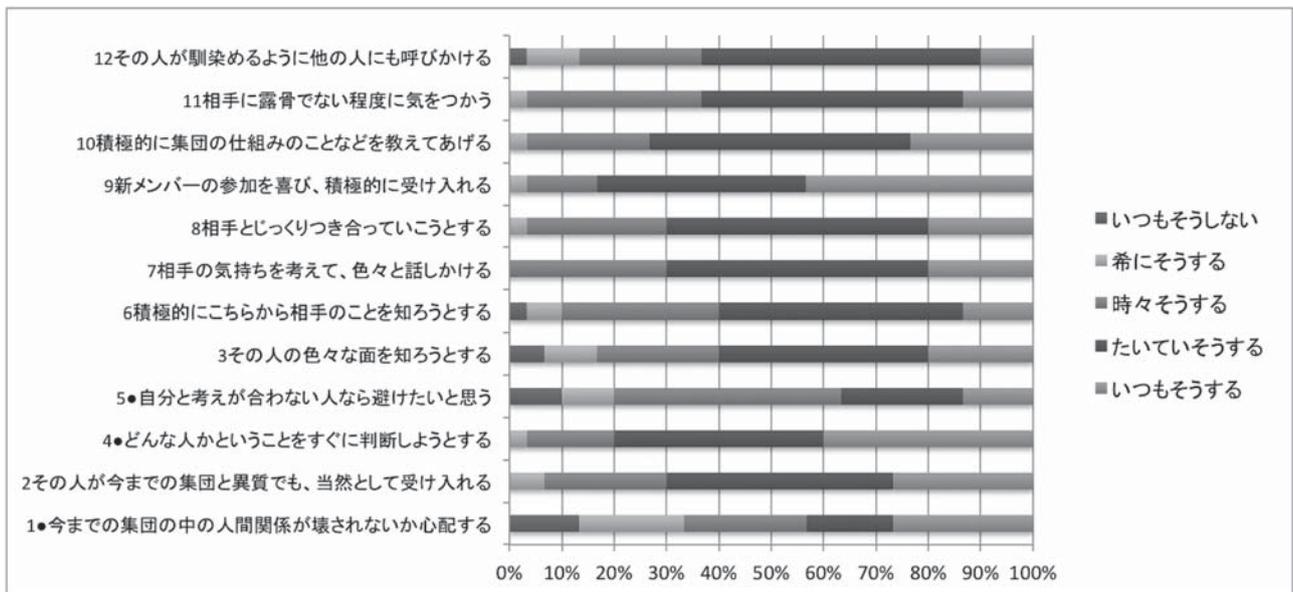


図 12. 異文化受容 (ポストテスト) N=28

じている項目が、「2 その人が今までの集団と異質でも、当然として受け入れる」である。その次にポジティブな評価に転じているのが、「6 積極的にこちらから相手のことを知ろうとする」である。

### 5.3. 結果と考察

学習成果の測定結果からは「主体性」についての成長が確認され、一方「異文化受容力」については成長が確認できなかった。このことについて、9月25日の振り返り会の時間内に記述を行った本プログラム全体の振り返りシートにおける学生の記述や、本プログラム中、学生と共にWACE大会の準備活動を行い、学生の動きを観察していた

スタッフの意見をもとに、分析者6名で一度、分析者2名で一度、計2回のディスカッションの場を設けて考察を行った。

振り返りの記述では、学生に対し、活動全体を通して自分の活動・行動を振り返り、100点を満点として自身を評価するよう求めている。また、その得点が得られた理由と、何をすれば、満点に近づいたかについて問うている。その得点が得られた理由を求める設問では、「積極的に外国人のサポートをすることが出来たと思ったのと、来場者とコミュニケーションできてよかったですから」「与えられた仕事はこなせたと思う。笑顔での対応を心がけた」等の記述が得られてい

る。何をすれば満点に近づいたかについての問いに対しては、「与えられた仕事以外にもっと自分で出来ることがあったのではないかと思った。事前学習として、もっと英語を学習すべきだった」「自分が担当する企画のメンバーを巻き込み、もっと意見しやすい・居心地の良い環境を作ることができればよかったと思う」「『もっと良くなるには何が必要か?』自分だけでなく、もっと沢山の人を巻き込んで考え、その人達と協力しながら目標実現のために『やるべきこと』を進めて行く事ができればと感じました」等の記述が得られている。また、活動を始める前と終えた後で自分自身の変化について振り返るよう求めた部分では、「海外の人に対して、言語の壁が少し薄くなったと思う。今までは、言語が通じずわからないと、すぐにあきらめていたが、粘り強く話すようになった」「活動を始める前の自分は自分の能力を過信するところがあり、丁寧な説明をするのが面倒臭いと感じたりすることがありました。しかし、活動を通じて、自分の驕りがあったり、目に見える能力以上に大事なものがあることに気づかされたり、リーダーとしてもっと丁寧な説明を心がけるようになりました」といった記述が得られている。また、3月からの活動全体を通しての満足度を問う質問では、「準備期間はしんどいと思うこともあったが、当日は本当に楽しむ事ができた。大満足です」といった記述も得られた。

全体として、主体的に問題に取り組むことについては、準備活動フェーズから当日フェーズまで試行錯誤の時間が確保され（しんどいと思うような経験を通じ）、自信を持つに至る経験が本プログラムから得られたことが結果に繋がったのではないかと考えられる。学生を観察していたスタッフは、リーダー以外の学生が特に準備活動の当初において、当事者意識に欠け、ミーティング等にも欠席が目立っていた（作業を怠っていた訳ではないが）が、当日が近づくとつれ、他のスケジュールを調整してミーティングに出席する者が増えた事を記録している。大会直前のミーティングでは、それまで消極的だった役職を持たない学生も、頼り切りではいけないと自らを奮い立たせ、自分で出来る事を言われなくても見つける様子が確認されていた。また、このような様子は、WACE大会初日より、3日目に顕著に見られた。各学生企画のイベントの取り回しにおいても、メールのやりとりすら不安のあったリーダーや担当学生が、当日ではまとめ役として采配を振るい、側にいた職員が頼もしく感じる程であった。

達成感を感じにくい準備活動においては、自ら

が希望した状況ではあったが、実際に任されて活動を続けることの辛さを感じたようだ。しかし、その辛さが当日、参加者の笑顔となって実を結ぶ感覚が本プログラムで得られたのではないだろうか。

一方、「異文化受容力」については、全体として、「もっとやれた」といった悔いの残る記述が見られており、リアルショック（現実と直面し、それまで比較的甘かった自己評価が急に厳しくなる状態）を受けた状態のままに、その反省を活かした再挑戦と、そこから得られる自信へと繋がる機会を得られぬまま、本プログラムが終了してしまった可能性が高いと考えられる。ただし、観察したスタッフによれば、WACE大会の1日目より2日目、3日目の方が、経験を積み、海外ゲストに対しても恐れることなく、声の掛け方を工夫したり、より多くの笑顔を見せたりといった様子が見られている。

## 6. 活動全体の評価と考察

本稿では、学生企画WGが「主体性」と「異文化受容力」を育成する正課外のPBLプログラムとして行った、WACE学生企画の一連の取組の設計と実施状況、及び、効果測定を報告した。特に一連の取組の内、合宿プログラムをモデルケースとして重点的に述べた。プログラムの設計においては、学生の「主体性」を引き出し、自分と異なる文化背景を持つ他者を受容する態度すなわち「異文化受容力」の形成を促すよう図った。効果測定では、これらの一連の取組によって学生達にどのような変化（学習成果）があったのかについて、「主体性」と「異文化受容力」の二つの観点から測定を行った。さらに測定結果について、分析者6名で1度、分析者2名で1度、計2度のディスカッションを通して得られた結果とその背景について考察した。

これらの一連の考察結果を、冒頭で述べた下記のa)～d)の到達目標の観点におけるWACE大会全での学生活動評価の中に位置付け、その活動全体の評価をふりかえることで、本プログラムの実施・調査報告のまとめとしたい。

- a) 学生が「主体性」と「異文化受容力（国際性）」を身につける
  - b) 来場者全般の参加満足度を高める
  - c) 学内のコーオプ教育への意識を高める
  - d) 学外へ京産大のコーオプ教育を周知させる
- このうち、a) について、5章を元に、6.1にま

とめ、6.2 で、b) ～ c) の観点からの成果について述べる。

### 6.1. 学生に関する到達目標に対する成果

5章に述べたように、学習成果の測定結果からは、「主体性」についての成長が確認され、「異文化受容力」については成長が確認できなかった。「主体性」については、準備活動フェーズから当日フェーズまで潤沢な試行錯誤の時間が確保され、自信を持つに至る経験が本プログラムから得られたことが結果に繋がったのではないかと考えられる。「異文化受容力」については、リアルショックという大きな成長機会に晒され、活動面では成長が観察されたものの、各自が自信を持つに至るような変容は見られなかった。

### 6.2. WACE からみた本取組

本稿で調査報告を行った教育プログラムは「本番に至るプロセス」を「本番の成功」に繋げることが必須という状況の中で実践されたところに大きな意義がある。すなわちこの教育プログラムは、「京産大生の気質と力を十分に発揮する」ことで「日本初の WACE 大会成功の一翼を担う」ことができるようにと取り組んだものであった。従って b) ～ d) の目標達成と a) の目標達成とは密接にかかわっており、ここで b) ～ d) について報告しておきたい。

b) 「来場者全般の参加満足度を高める」という点については、国内外の参加者から概ね高い評価を得るに至った。参加者アンケートの回答<sup>6)</sup>で最も多かった意見は「学生の積極的で礼儀正しい対応に感銘を受けた」というものである。これは主に受付、総合サポート、セッションサポートを担当していた学生に向けられた評価であるが、特に国内参加者からは「これぞ日本のおもてなし、と海外参加者に感じてもらえたのではないか」というコメントもよせられた。書道や茶道の体験型イベント、演武の披露などの日本文化紹介イベントでは多くの海外参加者が楽しむ様子が各会場で観察された。また京産大紹介の Student Session では「これまでの大会の中でベスト」という声もよせられており、そのクオリティの高さが評価された。最終日には学生メンバー全員に対して、CEO のポール・ストーンリー氏からの感謝の言葉に加え、会場の海外参加者から異例のスタンディング・オベーションが送られた。

c) 「学内のコーオプ教育への意識を高める」という目標の達成を実証するデータはとっていない。そこで、学内各部署との連携によって学内の

コーオプ教育への関心と参与を促した様子を報告したい。学生企画 WG では活動の実施にあたり、学生メンバーの募集段階から学部や委員会などへの協力を仰いだ。その結果、ほぼ全学部から学生メンバーの応募があり、その後、結成された「京輪」チーム<sup>7)</sup>の学生メンバーを通じて各部署の教職員、サークル、クラブなどの協力を得てその活動は多方面へ波及していった。「コーオプ教育への意識を高める」という目標には覚束ないものの、学生企画 WG の教職員と学生メンバーが連携して、協力部署や団体に、WACE 大会とその学生活動内容を伝える機会を提供できたことはひとつの成果と考えて良いだろう。

最後に d) 「学外へ京産大のコーオプ教育を周知させる」という目標の達成度について述べたい。ここでの「学外」とは京産大関係者以外の国内参加者を想定しており、その狙いのひとつは、当日の学生達の活動の様子を通して、学生企画 WG の教育プログラムの成果を知ってもらうということであった。その意味においては、日本の企業、高校、大学などの参加者から、学生の運営サポートともてなしに対して高い評価を得て a) の目標が達成できたことで、d) の目標もある程度達成できたといえる。来場者からは「自主的に行動を起こせる魅力的な学生ばかりだと感じ、ぜひ、採用させて頂きたい」といった具体的なコメントもよせられており、コーオプ教育に力を注ぐ京都産業大学のブランドイメージの向上に貢献できたと考えられる。また d) については、京産大の学生が自身のコーオプ教育体験を伝えることで、本学のコーオプ教育の実態を知ってもらうという狙いもあった。その実践である京産大紹介イベントのパネル展示、ポスターセッションにはコンスタントに来場者があり、学生の説明に熱心に耳を傾けて質問をする様子が繰り返された。これらの活動を成功裏に終えることができたということをその成果としたい。

WACE 大会全体からみれば、学生活動は「大会運営のサポート」と「参加者をもてなす」という役割を十分に果たしたといえる。全参加者の約半数を海外からの参加者が占めていた WACE 大会では、総合サポート、日本文化紹介、京産大紹介のすべての部門で英語その他の言語を使用する必要があった。初日は初めての国際会議ということで、英語の説明に戸惑う学生の姿も見られたが、徐々に交流の楽しさを感じ笑顔での対応ができるようになっていった。今後、これらの学生の生の声を知ることのできる質的調査データの分析をす

めて行く予定であるが、本稿で報告した量的調査データ分析の結果にも、学生企画WGが現場で接した学生達の状況が反映されている。学生達は、国際学会を肌で感じたことで主体性や業務遂行能力に格段の伸びを見せた一方、準備段階では外国人を含め様々な背景を持った参加者がある国際学会のイメージが描けずに活動が停滞したり、当日の対応に戸惑う姿がみられたりした。国際会議の経験のない学生たちにとって3日間という短期間で自らと異なる文化を受容し、満足のいく、状況に応じた対応をとるのは至難の業であっただろう。学生企画WGでは、この経験を糧として学生達に次のステップに踏み出してもらいたいと願っている。また、この教育プログラムには、キャリア専門外の教職員で構成される学生企画WGの取り組みに、教育という求心力をもたせてプロジェクトの完遂を目指すという面もあった。これらを踏まえ、本稿を学生企画WGで取り組んだ本教育プログラムの継続的研究の序としたい。

### 謝辞

本稿の実践・調査報告の対象となった教育プログラムのアンケートに回答くださった「京輪」の皆様、サポートをいただいた京都産業大学外国語学部の小柴健太先生、田畑恒平先生、そして活動の実施・運営にご協力を頂いた学内外の皆様に深く感謝いたします。

### 注

1) WACEは当初有償のインターンシップをカリキュラムに組み込むCoop Educationを推進してきたが、近年では必ずしも有償インターンシップに限定せず、専門と関連する学外での学びWIL(Work-Integrated Learning)を幅広くその範疇に加えており、両方の概念を含むCWIE(Coop & Work-Integrated Education)を広める交流、研究活動を行っている。詳細はWACE本部のWebサイトを参照。

2) コーオペ教育の定義はさまざまであるが、本学は早くから産学連携に取り組み、WACEに加盟した日本で最初の大学であることから、本稿では、注1で述べた、CWIEを基調としてオン/オフキャンパスを融合させた本学のキャリア教育を「コーオペ教育」としている。

3) 2015年本学開催のWACE第19回世界大会では24か国より、のべ1,362人(実数635人)の参加者があった。(WACE第19回実施報告書 概要版より)また、京都産業大学では本大会に先立ち、2014年8月31日にWACE大会のプレ大会(京都産業大学、2014)を実施している。なお、プレ大会の討論会については伊吹ら

(2015)を参照。

4) 経済的成長が著しい南アフリカにおいて、優れた労働力となる人材養成が急務であることから、ダーバン大学では、注1で述べたWILを積極的に大学教育に取り入れている。こうした背景から南アフリカ大会のテーマ“Wil-Power: Fueling the Future Workforce”が設定され、それに関連付けた“WIL-In-Action”を学生活動のテーマとして、その活動自体がWILの実践と位置付けられていた。

5) 反転項目とは、質問紙上の設問内容が調査内容に対し、否定的な問い方となっている項目を指す。反転項目では、通常の得点(今回であれば、1~5点)を逆の得点(5点を1点、4点を2点と換算し、同様に1.2点を5.4点に換算する)として換算する。

6) 本学が行った参加者アンケートは、①大会後に京都産業大学コーオペ教育研究開発センターが国内参加者向けにオンラインで実施したものと②大会中にWACE学生企画WGが実施したのものがある。後者については海外参加者からの回答が大半であった。いずれのアンケートの自由記述欄でも学生活動に対する称賛の声が多く寄せられた。

7) 「京輪」メンバーの学部構成は以下の表のとおりである。

	2年次		3年次		計
	男	女	男	女	
経済	1	1	3	1	6
経営	1	0	1	3	5
法	0	0	1	3	5
外国語	2	5	1	5	13
文化	0	1	2	2	5
理	1	0	0	0	1
合計	5	7	8	11	31

大会当日の運営については、「京輪」に加え、14人の学生がサポートスタッフとして参加した。彼らは京輪メンバーが協力を依頼した学生であり、語学力の高い学生が多数いたことから、大会運営、来場者対応の大きな力となった。また、キャリア形成支援教育科目「O/OCF-PBL2」において、株式会社JTB西日本からの課題「国際観光都市「京都」を訪れる外国人(WACE参加者)向けにオリジナルのツアーを企画・提案・実行しよう」に12名の学生が取り組んだ。彼らはまた、WACE学生活動のミーティングへの参加や京産紹介のPBL紹介で「京輪」の活動に協力した。

### 参考文献

伊吹勇亮, 大西達也, 富山雄一郎 (2014) 「グローバル社会を生き抜く力の育成に産学官がすべきこと: WACE世界大会 in Kyoto プレ大会 討論会報告」 高等教育フォーラム 5:pp.225-229  
WACE(1983) Advanced cooperative & work-integrated

education, <http://www.waceinc.org/> (accessed 2015.11.30)

- 植村善太郎 (2001) あいまいさへの耐性と集団成員性が新入成員への寛容的反応に及ぼす影響, 性格心理学研究 10:pp.27-34
- 京都産業大学 (2014) WACE プレ大会実施報告, <http://www.kyoto-su.ac.jp/path/wace/pre/> (accessed 2015.11.30)
- 田中寧 (2013) 「コーオペ教育の歴史と現状、および、日本における展開とその課題」高等教育フォーラム 4:pp.9-20
- 田中寧 (2014) 「ハーマン・シュナイダーとコーオペ教育：1914 年 米第 63 回連邦議会 下院教育委員会公聴会記録「職業教育としてのコーオペ型教育制度(全訳)」とその背景をもとに」高等教育フォーラム 5:pp.33-46
- 中西佳世子 (2014) 「海外大学コーオペ教育プログラムの事例報告：キャリア形成支援教育体系化 WG 活動の一環として」高等教育フォーラム 4:pp.89-104
- 成田健一, 下仲順子, 中里克治, 河合千恵子, 佐藤眞一, 長田由紀子 (1995) 特性的自己効力感尺度の検討—生涯発達の利用の可能性を探る, 教育心理学研究 43: pp.306-314
- 森洋, 後藤文彦他 (2013) 「京都産業大学における日本型コーオペ教育(産学協働教育)の構築と展開について：日本を救う「むすびわざ力」育成の経緯と課題」高等教育フォーラム 3:pp.51-58

welcome its delegates. At the conference, students were expected to extend hearty hospitality using their foreign language skills. Regarding this global environment as a unique educational opportunity, the WG began an extracurricular PBL program, which encouraged students to be involved in the activities from the very first step of brainstorming ideas. The main objectives of the program were to promote students' "self-directedness" and "receptivity of cultural differences," and thus supposedly to bridge their global experiences here to future ones. This paper provides an overview of the student-centered activities at the conference, introduces some methods and materials used, and evaluates its success at meeting its objectives.

KEYWORDS: Self-directedness, Receptivity of different cultures, WACE student involvement, Educational assessment of extracurricular PBL (project based learning) program

2016 年 1 月 14 日受理

- 1 Faculty of Cultural Studies, Kyoto Sangyo University
- 2 Center for Research and Development for Educational Support, Kyoto Sangyo University
- 3 Faculty of Life Sciences, Kyoto Sangyo University
- 4 Center of Research & Development for Cooperative Education, Kyoto Sangyo University
- 5 Faculty of Computer Sciences and Engineering, Kyoto Sangyo University
- 6 Faculty of Foreign Studies, Kyoto Sangyo University

---

## Practice and Assessment of Extracurricular PBL Program to Promote “Self-directedness” and “Receptivity of Different Cultures” — A Case Study of KSU Student- centered Activities at the WACE World Conference in 2015 —

---

Kayoko NAKANISHI<sup>1</sup>, Masae NAKAZAWA<sup>2</sup>,  
Seisuke KIMURA<sup>3</sup>, Naohiro YAMAMOTO<sup>4</sup>,  
Kodai OGINO<sup>5</sup>, Yukio SHIMODA<sup>6</sup>, Haruna TAIRA<sup>4</sup>

In 2015, Kyoto Sangyo University hosted the 19th world conference of WACE, an organization dedicated to advancing cooperative & work-integrated education programs. The task of the Student Involvement Working Group, as a part of the WACE Executive Committee formed at KSU, was to implement student activities to support the conference management and

